



平安だより

世田谷平安教会付属 平安幼稚園

2018年 9月号

「二〇〇万回よりも、この一回」

牧師・園長 長村亮介

*ニコニコ堂が来た。ニコニコ堂は玄関に入ってきた時から死人が風に吹かれて戸の隙間から人魂みたいに見えるようになって見えてくるように立っている。そして「アハア」と息を絶え絶えにしながら、鼻をすすっている。足音がしないのは、体重が足音をたてるには少なすぎると思う。

そしてソファに倒れ込むと「ちよつと失礼」と言っ、長い足をタランと椅子の肘掛けにたらし、ハアハアと真つ白な顔の中の目をつぶって胸で両手を合わせているから、まるで死人である。

ニコニコ堂は一応古道具屋なので、時々、皿を頼んだり茶碗を頼んだりする。姫鏡台を頼んでいたから胸に抱いて来たはずだけど、すぐに死人になってしまったので私はしばらく思い出せなかった。

うちに来ると、来るだけで精力をつかい果たして帰れなくなるので泊まって行くが、死人だから平気である。私は、元気はつらつとしたニコニコ堂は一度も知らない。

死んでるニコニコ堂に、あなたは子供の時からそんなだったのかと今日きいた。

「そう」死んだまま答え、「体育の時間はいつも立って見ている。いつも僕のほかには一人は仲間がいて、皆が運動しているのを二人とも正面を向いたまま会話していた」なぜか顔は合わせないのでさうだ。

「それが全国のきまりだと思おう」と死人は答えた。そして死んだまま、五分おきに携帯を見ている。死人にしてはまめである。

戻って来るべきメールが来ない様子であるが、五分おきというのはしつこい。

もうひとつのソファに私が寝ている。私のソファの方が大きくて、毛布とうすい布団と、その中に電気あんかが入っている。

私はもうすぐ死ぬはずだからである。*

佐野洋子 著『死ぬ気まんまん』

二学期が始まりました。園庭にいっぱい元気なお友だちの声が帰って来てくれるのを楽しみにしています。

佐野洋子さんと言えば、絵本『二〇〇万回生きたねこ』の作者としてご存知の方が多いと思います。乳がんと闘って二〇〇八年から七二歳で亡くなりました。このエッセイは二〇〇八年から「小説宝石」に連載されたものです。から、彼女が死に臨んで見える世界が、そのままに表現されているように思います。ただし、そもそも歯に衣着せぬ物言いが彼女のエッセイの個性ですから、それが死を覚悟して怖いものなしになっていくのが、このエッセイの魅力です。この「ニコニコ堂」はエッセイの中に数回登場するだけの、彼女のファンタジーと思えますが、私たちが彼女の世界に引き込んで、その正体は、実は彼女の心にある人生のいろいろな思い出や、また憤懣や、方のない思いがそれに表れているのかなと思います。

「一〇〇万回生きたねこ」は、満たされない自己愛の憤懣を力に変えて、一〇〇万回も生き返ったことが自慢でした。ところが自分より大切だった、どこかつれない「白いねこ」が死んでしまったとき、彼は初めて泣いて、もう二度と生き返らなかつたというお話です。そこには彼女の人生観が表れていました。私たちはとすると愛されることに人生の価値を置きがちですが、本当に大切なことは愛することなのだというメッセージがこの絵本にはあつて、「のらねこ」は彼女自身なのかも知れません。

彼女は家族や身近な人、愛する人を次々に亡くしていきとあります。誰でも同じですが、身近な者の死を経験すると生死に敏感になるものです。彼女にもそれがあつて、そういう人の生き死に関する感性、それは気が付くうと気が付くまいと、いつかは知らなくてはならない人間存在の根底にあるもので、人間の本性に関わります。彼女が宗教を認めていませんが、本来の宗教は、この世を生きていく利益だけではなく、私たちの生き死に對する姿勢を示して、私たちの往くべき生き方を教えてくれるものだと思います。そして私たちが死に臨んで、どうしようもない孤独を、その不安の中で過すことになりま。

上段の「ニコニコ堂」の言葉は次のように続きます。

「佐野さんが先に行ったら、僕の座るところなんかやんと用意しておいてネ」。イエスさまは十字架に向かわれる時に弟子たちに次のように言われました。

「行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。」(マテ 十四・三)〇